

「豪州での生活を楽しんでる？」。赴任して9カ月になる今、よく聞かれる。「非常に快適」と答えると豪州人は頷く。「食事がとにかくうまい」と言うところだろう」と満面の笑みが返ってくる。

「快適さ」を紐解いてみると、まずは人と人の距離。日本の20倍以上もある広大な大地に人口は5分の1の約2500万人。だから人口密度は100分の1。シドニーやメルボルンのような大都会でも郊外に30分も車を飛ばせば、人っ子一人見当たらない原野が広がる。ネオンと無縁の夜は限りなく暗く、眠りは深い。

シドニー空港に降り立った第一印象は、抜けるような空の高さと青さだった。がん治療のためにシドニーに来訪した歌手・俳優で友人の西郷輝彦さんも、動画で同じ感慨を漏らしていた。日差しが強さが違うのだ。サングラスなしに



やり直しのきく国

山上 信吾

随想

はとても外出できない。

だが、何よりの特徴は、広大なスペースや相次ぐ晴天の日々がもたらす開放感を体現した、この国の人々の気取らない温かさや包容力かもしれない。豪州人に薦められて見た映画にこんな台詞があった。「この国の人間は皆、何かから逃れるためにここに来たんだ」虐殺、圧政、貧困、前科、事業の失敗、家庭の破綻。先日、豪州を代表する高官と昼食を共にしていたら、先祖はアイルランドから来た囚人だと言う。その事実よりも、あけすけに過去を語れる明るさと率直さが眩しかった。

道誤まり、夢破れてなおも希望を追いかけた彼らの先達は、陽光煌めく赤土の大地を前に、再出発を誓ってきたのだろう。かたや、この地に6万年余り前からいたアボリジニには、違う歴史観もある。実に奥深い国である。

(駐豪州日本大使)